國際文化學部だより

No.10 発行／2004年7月30日・山口県立大学国際文化学部・〒753-0021 山口市桜畠3丁目2の1
TEL 083(928)0211　FAX 083(928)2251

英語カリキュラム改革と獅子座流星群

国際文化学部長　安野 早己

今春から英語カリキュラムが大幅に変わり、LL教室には英語学習用に40台のパソコンが設置された。この改革はシャルコフ助教授をはじめとする英語担当教員の努力によって可能となったが、私自身にとってのきっかけは獅子座流星群の出現であったことを記録しておきたい。

2001年夏の教授会のことである。議事終了後、「メディア教育開発センター」というところが、沖縄・渡嘉敷島でおこなう「英語による授業」という研修に参加者を募っているとの連絡がなされた。国際文化学部では毎年センター大学からやって来る交換留学生に向けて英語で授業を提供している。半年間、90分英語で教えることは留学体験のある教員にとってもなかなか困難で運営に四苦八苦していたところから、学科主任であった私は教授スキル向上のヒントでも得られればと思って研修参加に手をあげることにした。しかし、直接の動機は、研修期間中の11月19日午前3時19分に獅子座流星群が最もよく現れ、沖縄でなら必ず見えるはずとゼミの男子学生が教えてくれたことにある。

海の見渡せる沖縄青年の家で始まった2泊3日の研修では、全国の20以上の大学から集まった教員から、短期交換留学プログラムの運営に苦労しているという体験が披露された。要は英語の授業を引きうけてくれる教員が限られている、有名大学でも（有名大学だからこそといえるかもしれないが）指導内容がお粗末で米国の相手大学から交換留学協定を取り消されているところが少なくないなどという実情も漏れ聞こえてきた。しかし、研修はこの問題にとどまらず、立教大学でのカリキュラム改革によって学生の英語力をアップする試み（日本人教員も授業中は英語のみ使用する）や、広島市立大学国際学部青木教授のパソコンによる英語自習プログラムの開発によって学生のTOEICテストの得点が平均して200点アップしたことなどが次々と紹介された。

交換留学より、まず、日本人学生の英語をなんとかすることの方が大事だと実感した私は、山口に帰ると、英語担当教員に、カリキュラム検討委員会をたちあげること、現状を改革するためにまず自ら英語教育の先進大学を視察しようと呼びかけた。こうして翌春、広島市立大学の語学センターに国際文化学部教員6名、同志社女子大学に4名、さらにのちに慶応大学藤沢キャンパスに2名が視察に訪れることになった。

一方で、情報処理担当教員の協力を得て、パソコンを用いて学生が語学を自習するソフトが市販されていないか調べてもらい、「アルク」という語学教育で有名な会社が「ネット・アカデミー」というソフトを販売していることを知った。早速、大学でそのソフトのデモンストレーションをしてもらうことになった。TOEICテストに即した実力アップにむけた学習内容は素晴らしいものの、問題はその値段が数百万円もすることで、学部予算の範囲ではとても対応できないことだった。

カリキュラム改革のなかみは、要約すると以下のとおりである。従来の「英語」と「英会話」という区分をとりはらう。英語を本気で身につけようとする学生には、週2回同じ教員が集中的に教える、そうでない学生には多様なトピックを用意して興味のあるクラスを選択させる。大学レベルの授業についていける実力がない場合は補習を受けさせる。実力が同程度の者が同じクラスになるようクラス分けにはTOEICの得点を用いる。またCALL（その導入については平成15年度の国庫補助をうけることができた）を用いて、自学自習をすすめる。

さて、獅子座流星群であるが、同室となった研修仲間と渡嘉敷島の丘の上の広場に毛布を持ち出し寝転んで待っていると、予想時刻前から次々と現れては消え、我を忘れて歓声をあげてしまった。もっとも、山口でも流星群は十分堪能できたという。流星のためにわざわざ渡嘉敷まで行かなくともよかったかもしれないが、行ったおかげで、全国の大学の教育に対する必死の取り組みを肌で感じ、発奮することができた。獅子座流星群大出現に感謝している次第である。

卒業生を送る演奏

三宅 義子教授
山川菊栄賞受賞

女性学研究室

教授　三宅　義子

私は、一昨年の終わりに、10年がかりで書いた論考をまとめて著書『女性学の再創造』（ドメス出版）を上梓した。女性学は誕生して30年余という歴史の浅い分野だが、最大の功績は、「セックス」（生物学的性差）と区別して、「ジェンダー」（社会的文化的性差）概念を創造したことである。これによって性差別の由来が明らかになっただけではなく、周辺化された女性にまなざしを向けることで私たちは「正史」から隠されたもう一つの歴史像を描くことが可能になった。私の試みは、日本の近現代史にジェンダー分析を導入することで、新たな問題領域を発掘し、女性学の活性化を図ろうというもので、それがタイトルの意味するものである。

この『女性学の再創造』が、2003年度の山川菊栄賞に選ばれたのだから、嬉しさも格別だった。2月1日の授賞式でおこなった「今なぜ女性学の再創造なのか」という記念スピーチを、私は、受賞の知らせを受けて詠んだつぎのような一首で締めくくったものである

理知をもて時代を生きしその名前
我も歩まん正義への道

山川菊栄（1890―1980）――日本近現代史が生んだ第一級のフェミニスト理論家というのが私の山川評価であるが、同時にこの人は文筆家としても健筆を揮い、『おんな二代の記』『武家の女性』『覚書　幕末の水戸藩』など多くの優れた作品を残した。政治、社会問題を論じる場合であれ、歴史をとらえる場合であれ、山川の文章にはいつも透徹した女のまなざしが光っている。

平塚らいてうはじめ、日本社会の男性中心主義を告発したフェミニストの多くが文学指向だったのにくらべて、山川は、社会主義者の道を選んだことが示すように女性問題の理論的把握において傑出していた。そのような山川の資質は、1931年に起源をもつ日中戦争の拡大を侵略戦争ととらえ、戦争批判の立場を貫かせた。これは、初心を捨てて銃後の女性動員に一役買った多くのフェミニストの行動とは一線を画すものだった。戦後、創設されたばかりの労働省婦人少年局初代局長に招聘され、労働現場における女性の地位向上に貢献できたのもこのような山川の経歴と資質の賜といえよう。

山川菊栄の簡単な紹介から、私の拙い仕事が、そのような人物の名前を冠した賞を受けたことで、それを光栄に思うと同時に、今後の研究の方向性を考えるうえで大きな励ましを得ていることがわかっていただけたと思う。自己目的化した研究のなかで自分自身を見失わないためにも、この先達の足跡に学んで、つねに社会との接点を問い直しながら精進したいものだと決意を新たにした次第である。

三宅義子教授略歴　Miyake Yoshiko

慶應義塾大学経済学部卒業。カリフォルニア大学大学院博士課程修了。女性誌編集者などを経て、1994年から山口県立大学国際文化学部教授。専攻は女性学、女性史。

2003年11月

初出場で最優秀賞

「県立大学のハングルパワーはすごい!」

11月9日下関で開催された第12回山口県韓国語弁論大会に、本学が初めて出場しました。本学から国際文化学部の学生3人が参加し、この3ケ月間練習した成果が発揮され、立派なスピーチを行いました。

2年生の佐達今日子さんが最優秀賞、4年生の広重聡子さんが優秀賞、3年生の大浜裕美子さんが奨励賞となりました。

「初めて参加した県立大学のハングルパワーはすごい!」と審査委員の方々から褒められて、学生にも良い刺激になりました。下関市長も応援に駆けつけて下さって、大変盛り上がった弁論大会でした。

以下は、佐達さんと大浜さんの体験記です。

韓国語弁論大会に参加して

佐達　京子

私は昨年(2003年)山口韓国青年商会主催で行われた第12回山口県韓国語弁論大会に出場しました。県立大学からは、私を含め3名の学生が出ました。出場者は学生の部9名、一般の部5名が参加しました。学生の部には小学生も、北九州の大学生達もいました。

私が弁論大会で話した内容は、高校の時に第二外国語として韓国語を学び始めたきっかけや、韓国語学研修での体験談です。具体的には、語学研修でホームステイをしたりしてカルチャーショックを受けたことや、韓国の伝統扇子舞踊プチェチュムを習ったことです。プチェチュムの華麗な扇子を持ち優雅に踊る姿に感動し、自分達も一生懸命練習したりして、日本に帰ってから家族や友達にも見せてあげたいと思い、高校の文化祭の時に発表できる機会がありました。このように、韓国の伝統的な文化を通して日韓両国がよりよい隣国関係になるようにと訴えました。

私は、最優秀賞を頂くことができました。弁論大会に出たことは、私にとって貴重な体験であったし、これからも色々チャレンジしていきたいと思っています。

電波にのせて

大浜　祐美子

世の中は今、空前の「ヨン様」ブームである。「冬のソナタ」が日本で放送されるようになって、ドラマの主人公、ペ・ヨンジュンの優しくて爽やかな笑顔は日本の女性の心をとらえた。正直、私自身、ヨン様はあまりタイプではないけれども・・・。しかし、私は韓国の礼儀正しい文化や、辛いけど元気になれる食べ物、韓国の女の子の話し方、韓国人の情熱的で仲間を大切にするところが大好きだ。

昨年(2003年)の11月、私は韓国語弁論大会に参加し、そこで「電波は簡単に国境を越えることができる。電波のように、私たちの心ももっと軽くお互いの国を行き来することができる日を望んでいる」と言った。それから半年たった今、韓国では、日本文化が全面解禁になり、日本では以前よりも韓国のドラマ、映画が次々に入ってきている。

今、両国はエンターテイメントを通して歩み寄ろうとしている。この状況がブームではなく日韓関係進展の経過とするには、私たちのお互いの国を理解しようとする気持ちこそが何よりも大切なのだと思う。

国際文化学部
研究室だより

国際関係論Ⅱ研究室

教　授　　近藤　淳子

私の研究分野はアメリカ外交史です。2001年9月11日の同時多発テロ以来のアメリカ政府のテロリズムに対する対応を観察しながら、20世紀のアメリカ人の戦争と平和の概念について再考しています。基礎演習と専門演習では20世紀に起こった戦争を事例としてとりあげながら軍事的・政治的側面だけでなく経済的・文化的・人道的側面からも学生と一緒に戦争と平和についての考察を行っています。戦争という話題はとかく感情に走る傾向があるうえにＩＴ時代のマスメディアの情報の行き過ぎの中で、客観的に国際社会の情勢を把握できるように歴史的基礎知識を養い、現代の戦争の状況を学生が冷静に判断できるようになるのを願いながら授業をしています。学生は積極的に授業に参加しています。

現代の学生はアメリカの文化、特にハリウッド映画、ファッション、アメリカの食べ物は好きだが、国家としてのアメリカは好きではない、またはほとんど関心がないようです。外国といえばまずアメリカを思い起こす戦後ベビーブームの私の世代とは世界観も価値観も違うということを痛感します。アメリカ中心に世界が動いていると錯覚した時代は消えつつあります。例えば、私が学生時代によく利用した某大学の資料館の名称もアメリカ研究資料センターからアメリカ太平洋地域研究センターに変わりました。グローバリゼーションの時代になってきているのです。学生の国際社会への関心もアメリカだけでなく韓国・中国・ＥＵなどと幅広いものになり、実際に自分の目で確かめてきたい、そのためにアルバイトをしている学生もかなり見受けられます。積極的に国際社会に参加しようとする彼らの意気込みにはエールを送りたいと思います。最近はテロもグローバリゼーションしてきているので、安全に関する情報は常に持っておくという心構えは必要でしょう。

英語学研究室

教　授　　下笠　徳次

当研究室の看板は英「語」学研究室です。時代の波に洗い流され、英語学英文学を学ぶ学生がめっきり減りました。中でも英「語」学は堅いと見えるのか、いずこの大学でもゼミ生は限りなくゼロに近いようで、悲しいです。文学の知識の涵養は人間形成の上でとても大切なことです。その文学の根底にあるのは言葉です。語学と文学は絶えず補完しあっています。本気になって勉強し始めるととても面白い分野ですよ。食わず嫌いが多いのかな。

私は古典英語を少しかじっていますので、その方面の勉強をしたい人が入室して下されば言うことはないのですが、まず望みはありません。今年入室したゼミ生はカナダの方言を卒論に取り上げたい、ということで現在、方言学の研究書（原書）を一緒に読み進めています。カナダ西海岸(British Columbia)に特定します。Canadian　Englishの方言を語法、語彙、発音の方面からアプローチしていくことになります。カナダは言語政策の上でいつも行政のトップに立つ人は気を遣います。英語とフランス語が公用語で、中でもケベック州はフランス語が断然優勢です。大きな都市、町は合衆国と隣接しているので、アメリカ英語の影響が大です。どうしてもアメリカ英語の知識がないとだめです。カナダの東部と西部ではまた異なります。Canadian　Indianの英語もあります。「非」英語（フランス語）的な綴りの地名が多いのに気づきますが、それは現地の言葉なのです。一通り研究書を読んでから、具体的な素材を読んで材料を蒐集してゆきます。素材は文学作品が一番よいのですが、いろいろな特徴を見出すには異種のテキストに当たった方がいいので、ジャーナルや時事的な読み物なども視野に入れて多角的に調査していきます。もちろん究極の辞典Oxford English Dictionary (OED), English Dialect Dictionary (EDD)を常に座右に置き、正確さを期します。大変熱心なゼミ生ですので必ずや「結果」を出してくれるはずです。

日本語Ⅰ研究室

教　授　　武市　眞弘

宮古のニリ・アヤグ探訪のことなど

西暦二千年３月24日、宮古。空港で出迎えてくださった山里正一氏の車で城辺町教育委員会に行き、下地和宏氏に逢う。「ニリは聞かしてもらえない。近頃は歌える人もだんだん少なくなってテープに採って祭りを継いでいる状況」の由。上田長福氏宅に案内され奥さんのニリのテープを録音させて貰い、アーグのＣＤ一本を分けてもらう。27日、伊良部。仲間文治教育長から譜久島方上氏を紹介され、伺ってテープ「伊良部島民謡集」とＬＰレコードを貰う。28日、多良間。本村恵真教育長のお世話でテープ３本を録音。

「なぜ沖縄の、しかも宮古なの？」か。学長企画室「ワーキング・グループおよびプロジェクト・チーム」の「国際交流グループ」の「アジア＝オセアニア・セクション」所属教員の中に自分の名前を見つけた。〈何か下調べでもしておいた方が無難かも〉と思った。地域共同研究センターの「サビエルプロジェクト」に知らないうちに組み込まれていた時も急に提出物を求められて焦ったことがあったからだ。

さて「アジア＝オセアニア」に関するどんな「ワーク」が私にできようか。悩んだ挙句、柳田国男『海上の道』と伊波普猷『古琉球』を読み、沖縄県宮古島にアプローチすることとした。そもそも本学に於ける私の担当科目は「日本古代語」である。しかし国際文化学部の学生にとってそんな科目などあまり興味がないみたいだ。伊波の著書には何度も「沖縄には古語が残っている」という指摘がある。そうか、「日本古代語」と「沖縄方言」か。これなら私の専門と関わりがありそうだ。それが私の新たなる課題となったのである。

平成11年度と13年度の二回、本学の研究活動助成事業に認可され、宮古のニリ・アヤグ・多良間村の八月踊の取材と相成った。平成15年度の県費でDVDを購入。石川正一氏の協力を得てDVD化に努めている。こんなところが私の近況でしょうか。

音楽研究室　　教　授　田村　洋

ブラスバンドが立ち上がった。

３年前、学生有志が集まり１０名以下のささやかな楽団が誕生した。楽器も個人所有のバラバラな編成、それでも週何度か集まり音楽の喜びを共有した。ベートーベンの言葉「心から心へ」その物のような日々だった。ある日メンバーから、韓国慶南大学の文化祭に出演が決まりましたと連絡があった。発足したばかり１曲のレパートリーもない楽団が演奏する。それも海外で、無謀とも言える学生の行動に私は驚いた。が話は進み時は過ぎて行った。１０名のメンバーで既成の楽譜で演奏する事は不可能であった。学部の李先生に相談し慶尚南道地方の楽譜を手に入れ編曲に取り掛かり、五月の玄界灘を渡り演奏した。韓国民謡を中心としたプログラムは満場の喝采で迎えられた。１０名の楽団員の誇らしい顔が今でも目に浮かぶ、まさに「心から心へ」だと感動した。少数の学生の情熱で立ち上がったブラスバンド、今では４０名の立派な楽団となった。

ヨーロッパを旅すると公園や広場で街のブラスバンドや合唱団が市民の為に演奏している光景をよく見かける。人々はおしゃべりをしたり子どもをあやしながら音楽を楽しみ、街の風景と暮らしが一体となり美しいハーモニーを作り出している。パリの地下鉄で見かける演奏家たちも厳しいパリ市の厳しい試験を合格した人々だそうだ。人々の集まる所、音楽あり、音の文化の深さを感じる。大学に音の文化を・・・昨年１２月第一回定期コンサート、その後、卒業式、入学式、地域の宮野まつり、県民文化祭、桜圃会総会、学内でのガーデンコンサート、水無月祭と音の輪が広がり始めた今いくつかの夢がある。その一つが１０名で奮闘した韓国慶南大学で４０名と音楽的にも成長した楽団と共に演奏会を開きたいと言う夢だ。「心から心へ」音楽を通じての文化交流に思いを馳せている。

英文学研究室　　教　授　松田　理

英語能力検定について

平成１６年度から本学では学生の英語能力を客観的に評価するために、ＴＯＥＩＣと呼ばれる英語能力検定試験を正式に導入しました。新入生は入学後すぐにこの試験を受け、自分の英語能力を知ることができ、またその成績を参考にしてレベル別に設定された英語科目の中から自分に適した科目を選択して受講することができます。特に成績優秀な学生はその成績に応じて２科目までの必修英語科目の履修が免除され、その科目を受講しなくても、受講したものとして単位が認められます。つまり優秀な学生は浮いた時間を使って更に高度な学習ができるというわけです。今年度前期は実際に数名の学生に対してこの制度が適用されていますし、今後成績が向上して今年度後期以降にこの制度の適用を受ける学生も徐々に現れるものと思われます。また、国際文化学部の新入生は概して英語の学習意欲が高く、大半の学生が「英語集中コース」というやや高度な科目から成るコースを選択していますので、学部全体として学生の英語力が大きく底上げされるはずです。

私も英語科目担当教員としてこの度のＴＯＥＩＣ導入には少なからず期待を寄せています。導入に伴う学生の英語力の向上については確信もしています。しかし、内心不安が無いわけではありません。英語力の向上が個人の「生活の質」の向上に無条件に結びつくものかどうかという疑問です。この疑問は、国をあげての英語礼賛の風潮や「英語ができなければ」という強迫観念によってしばしば覆い隠されてしまいますが、大学教育においては見過ごすことのできない問題です。実は、英語ができれば「生活の質」が向上するのではありません。豊かな教養や専門知識・技能を十分に身に付けた上で英語ができれば「生活の質」が向上する可能性があるのです。豊かな教養や専門知識・技能をさておいて英語ができるというのは１０才のアメリカ人の子供のようなものです。日本人のどんな大学生よりも流暢に英語を話すことができ、ＴＯＥＩＣも満点に近い成績がとれても、１０才のアメリカ人に社会人としての能力を期待することはできません。学生の皆さんには、「学ぶことの意義」を考えつつ英語の学習に力を注いでいただきたいと思います。

実践英語Ⅱ研究室　　助教授　エイミー・ウィルソン

e－ラーニングの挑戦

総合教育の英語カリキュラム改正の一部として、ＬＬ教室（語学自習教室）が大幅に改良され、新しいコンピュータを４５台程度と新しい英語学習ソフト二種類が設置されることになりました。全学のことではありますが、国際文化学部の特色を考えて、ここで触れたいと思います。

近年の英語教育界では、実践力重視の傾向にあり、中高の英語教員にも英検・TOEFL・TOEIC等の英語能力試験の具体的数値目標が設定されたり、企業でも入社・昇進昇格の条件にTOEICスコアを設定するところが多数あります。そこで、全国の大学ではそれに対応したカリキュラムへの改革が進んでおり、本学でも、今年度から開始した新英語カリキュラムにおいては、入学直後に行うTOEIC団体試験の成績によるクラス分けや単位認定を始めたところです。又、そのための教材として、今年度より、LL教室（ランゲージ・ラボ：語学自習室）にＣＡＬＬ（コンピュータ・アシステド・ランゲージ・ラーニング：コンピュータを利用した語学学習）教材を導入し、新１年生を中心にその運用を開始しつつあります。

現時点では、学生が授業の一環として、週に数回の30分から１時間程度学習するように指示されていて、リーディング速度を上げるための練習や、聞き取り能力を上達させるために、ヘッドフォンを使ったリスニングの練習をしています。学生の反応を尋ねたところでは、「最初は、強制的にやらされることにとまどいも感じたが、段々とその良さを実感してきた。身近に英語を聞くことができて試験の準備にも大変役立っている。」と好評です。

国際文化学部の学生がアメリカ・ケンタッキー州のセンター大学での交換留学の準備として、また就職活動の一部として、多くの利用を期待しております。また、私たち管理人として、より効果的な使い方を追求しつつ、毎日学生と接し、語学勉学の環境を充実させたいと思っています。

尚、ＬＬ教室は平日の昼間に開放しておりますので、近くにいらっしゃいましたら、どうぞお気軽にお立ち寄りください。

中国文学研究室　　助教授　川口　喜治

趙秩「温泉春色」試注・存疑

２歳になる息子が夜になると「湯田の町の灯がついたね」と覚えたてのことばで話す日々。すこし高台にあるわが家からは湯田温泉が一望できる。かつてこの湯田温泉を明の使者・趙秩という人が「温泉春色」なる題で漢詩に詠んだという。荒巻大拙氏の『山口十境詩考』から引くと「山川秀孕陰陽炭、天地鋳成造化爐。誰献玉鴟天宝後、派分春色到東隅。」前半二句は、前漢の賈誼の「鵩鳥賦」に「且天地為爐兮造化為工、陰陽為炭兮万物為銅。」とあるのを典拠とするのは間違いないが、作者が直接意識したのはむしろ、唐の時代に都・長安からはるか西域（シルクロードの地）を訪れた岑参という詩人の「経火山」詩中の「不知陰陽炭、何独燃此中。」あるいは「熱海行」中の「陰火潜焼天地鑪、何事偏＿西一隅。」と思われる。岑参が訪れたのは西域、趙秩はいわば東域、ともに中国本土からは塞外の地であることが共通し、なおかつ「火山」「熱海」は、「温泉」と類似の関係にあることばと考えてよいだろう。四句目も、やはり唐代の辺塞詩人・王之渙の「涼州詞」の後半「羌笛何須怨楊柳、春光不渡玉門関。」を反用したものと見てよかろう。してみると西域にある玉門関から向こうの西の地には春はやって来ないとうたう王之渙詩に対して、趙秩詩の結句は同じ塞外の地でもここ湯田温泉には春の景色が訪れるのだという一種の賛辞と読むことができよう。ところで結句の解釈とも関わるのだが、実は私には趙秩詩の三句目がよくわからない。「玉鴟」は手許の大きな辞書やインターネットのデータベースで調べても見つからない極めて珍しいことばである。また「天宝の後」が何を指すのかもわからない。すぐに思い出すのは杜甫の「無家別」の冒頭「寂寞天宝後、園廬但蒿藜。」であり、ここで「天宝の後」は安禄山の乱勃発後を指す。安禄山の乱の悲劇のヒロインといえば楊貴妃で、それは山口の油谷の伝説で有名だが、何か関連があるのだろうか。私が山口の歴史に全く暗いために理解できないだけかもしれない。ご存知の方はお教え下さい。

日本語II研究室　　助教授　野口　義廣

1988年12月、中小路駿逸氏の「『日本書紀』の書名の「書」の字について」と題する論考が発表された。

これは、これまでの日本の人文科学研究の世界の根底をなしていた【本居宣長以来の日本史“一元通念”が無効である】ということを完膚なきまでに証明したものであった。そのことにより、日本の人文科学研究の前提が変更(パラダイム・シフト)されたのだ。まさに【日本史学界空前の“コペルニクス的転回”】とも言えるもので、その影響をおよぼす範囲ははかりしれない。マスコミは何も騒がなかったが、大変な事柄が静かに進行していたのだ。

以上のことが了解された私は97年・02年「“防長学”事始め」(正／続)を発表し、【氏の言説への賛意および研究史上の位置づけと、中小路言説についての学界の“無視現象”の指摘等】を公表した。それからさらに２年。いずれからも賛意の表明はなく、事態は７年前と大差ない。中小路氏以外には、日本に“叡知”はいないということであった。

現在進んでいるかに見える英語・コンピューター教育、これは明治の欧化政策に似ている。中小路氏の古代探究によって明らかになったことは、【自分の頭で考える人間を作って来なかった】という意味において、明治以来の日本の学校教育が全く無効であったということを意味している。別な言い方をすれば、読み書きの達者な奴隷を大勢作りたいという、明治政府の目論見が見事実現したということでもある。

前世紀末、わが国では“バブル”がはじけた。しかし、それは経済面におけるものであった。この次に来るのは、というよりもそれはもうすでに来ているのだが、ほとんどの人に知られていない。次なるものは《“知”の世界》におけるものである。

これと似たようなことは西洋中世のキリスト教社会にもあった。自然科学の世界における“天動説”と“地動説”の切り替えの問題がそれである。

この問題は以後どのような経過をたどったか。本件同様興味深い。

日本近代文学研究室　　助教授　加藤　禎行

わたくしは、平成14年11月に急逝された清原万里先生の後任として、平成15年10月1日付けで山口県立大学国際文化学部国際文化学科に、講師として着任した。山口県に転居する以前は、山梨大学教育人間科学部非常勤講師、大妻女子大学文学部非常勤講師、国文学研究資料館特別調査員等の職に従事しつつ、埼玉県所沢市久米という地域に居住していたが、現在は配偶者及び子とともに県立大学近隣の平野公舎に居住している。わたくしが専攻している研究領域は日本近代文学であり、現在は19世紀から20世紀にかけての日本における文学・出版社・出版物を研究対象として、資料調査・文献精読に従事している。平成16年度現在、国際文化学部で担当している授業科目は、「基礎演習」「専門演習」「卒業論文」のほかに、展開科目の「日本近代文学Ⅰ・Ⅱ」、関連科目の「日本文学史（近代）」「日本文学（近代）」があり、それぞれの教場で教育の任に当たっている。また国際文化学部の開講科目ではないが、国際文化学部を含む全学部学生を対象として開講される基礎科目「文学」についても、授業を担当している。なお、わたくしは山口県立大学附属郷土文学資料センターという研究機関の研究員も兼任しており、本大学の設置者である山口県に関連する、地域社会の文学資料の収集整理・研究もまた、職務のひとつとなっている。着任後、いまだ半年ほどの勤務実績を持つにすぎないが、国際文化学部の教育理念として掲げられた、「人間尊重の視点に基づく国際感覚の涵養」「多様な文化を理解するための視点の確立」「地球社会の孕む問題の発見と問題解決能力の養成」「地域と世界とを結ぶ能力の養成」という命題に、随時、従いつつ、授業準備・学内事務・研究活動等の職務にあたるよう心掛けている。わたくしが勤務する日本近代文学研究室は、旧キャンパスC号館1階北側に位置している。ご用件、お申し付け等がおありの際には、お訪ね下されば幸いである。

留学から戻って

近年、本学部でも留学する学生が増えてきました。
以下は、頼重さん、高植さん、有井君の帰国報告です。

アメリカ、ケンタッキー州にあるセンター大学での留学について

頼重　今日子

この留学の１０ケ月間にはたくさんのことがありすぎて、整理がつかないほど色々な経験をすることができました。英語を習得するためにアメリカに行くという感覚を持っていた私でしたが、いざそこで生活をするということ、ましてネイティヴの学生にまじって勉強することは想像を絶するものでした。誰も英語を教えてくれない、留学生だからといって考慮してくれない。少しの甘えがあったのか、最初の２～３ケ月は理解できない悲しさで過ぎ去ってしまったような気がします。人とのコミュニケーションは慣れてこなすことができても、授業だけは私のために止まってくれませんでした。初めて自分が独りなことを感じて閉じこもることも少なくありませんでした。日本の大学の勉強量は海外に比べて少ないと耳にしたことがありますが、まさにその通りと痛感する宿題の量、そして学生の勉強に対する意気込みに、今までの自分の姿が恥ずかしくなるほどの違いに愕然としてしまいました。

３ケ月たってくると、“勉強”に慣れてきました。相変わらず分らないの繰り返しですが、分らないところを友達に聞く、または先生に相談するなど自分から行動することを自然に学んでいきました。ちょっとした質問をすることで友達ができたり、先生に自分の状況を理解してもらえたりと、自分に置かれている環境を変えることができました。理解できた時の喜びは大きく、そしてまた自分への自信にもつながってきました。友達と勉強会を開いて、学生同士で勉強の話をしてみると、みんなもこんな単純な質問をもっているのかと思い、自分もその一人なのだと気づいてきました。また、社交的なイベントにも自分から参加するようになり始め、勉強以外にも楽しい時間を過ごすことができました。友達との付き合いが一番の思い出です。笑ったり、怒ったり、泣いたりと普通の友達関係を知らぬ間に築いていき、彼らが私を支えてくれたことに感謝しています。言葉、文化の壁を超えての人間付き合いは私をとても大きくしてくれました。正直言って、何を授業で学んだのかはっきりと頭には残っていません。しかし、自分の身をもって、自分がその立場にたつことで、異文化の大切さや面白さを学ぶことができたことは、私にとって大きな財産になりました。

中国留学を終えて

高植　裕子

私は、去年２月から今年２月まで、中国山東省済南市の山東師範大学に留学しました。その前に夏の短期語学研修で曲阜師範大学に行った事もあり、中国の街や雰囲気を知っていた為か、割と早く生活に慣れることができました。

中国での一番の印象と言えば、人と人との交流がある国だと思いました。大抵の店では、店の人との値段交渉という交流があるし、2､3度通うと顔見知りになってしまいます。汽車に乗ると、「どこまで行くのですか？」と声をかけられ、１時間もあれば向かいや隣に座った人とお喋りをしたり、トランプをしていたりします。さらにトランプを観戦する人まで周りに集まってきて、賑やかに列車の旅をすることもよくありました。日本だったら、隣に座った人と一言も話さないなんてことがよくあるし、話し掛けないのが普通なのかもしれません。しかし、良い場面ばかりでなく、改善しなければならないような場面もあります。路上で働いている子供や、そこらじゅうに投げ捨てられたゴミ、人身売買…。中国に行って、２つの国の良い面、悪い面を見ることができたように思います。

留学は言葉や文化を学ぶことはもちろん、自分の国を見る良い機会だと思います。外国に出て日本を客観的に見てみることも面白いことだと思いました。また、中国・日本以外の国の学生とも交流することができ、文化の違いからか衝突することもありましたが、とても良い経験になりました。これらの経験が、私のこれからの人生をちょっと楽しくさせてくれるような存在になってくれたらいいなと思います。

リトアニア語の魅力

有井　聡

この度、昨年の９月から今年の６月まで続いたリトアニアでの勉強を終えて帰ってきました。リトアニアというのはヨーロッパの東側に位置し、ラトヴィア、ロシア（カリニングラード）、ポーランド、ベラルーシそしてバルト海にはさまれた、人口は350万人、面積は日本の約６分の１程度の小規模な国です。しかし、今年の５月にＥＵ加盟、３年後にはユーロの導入などヨーロッパの一員としてこれから注目すべき国の内の一つです。

滞在先は首都のヴィリニュスという街でした。ここの旧市街地は16世紀に建てられたヴィリニュス大学を中心として、大統領官邸や旧市庁舎、様々な教会などと、古風なつくりになっていて、中世のヨーロッパはこのような雰囲気だったのだろうということをどことなく感じさせてくれます。旧市街地全体はユネスコの世界遺産にも登録されており、観光に訪れるには魅力的な街であると思われます。現に、滞在中何度も日本人観光客と出くわすことがありました。外国人もあたたかく受け入れる気さくな人柄がリトアニア人の特徴で、治安の面でも心配することが無いほど安全な国です。

リトアニアではリトアニア語が公用語として話されています。今回の留学の目的はこのリトアニア語を習得することでした。非常に古いインド・ヨーロッパ語の形を保持し、言語学の分野で注目を集めている、と言われているにもかかわらず、本格的にリトアニア語に取り組んでいる日本人の数が少ないため、面白い成果が得られるのではないかと思い、リトアニア語を始めました。理由はどうであれ、現地に行って勉強してみると毎日数多くの刺激を受け楽しいものでした。また、リトアニア人だけではなく、他の外国から来ている人たちとの交流もあり、人生がより豊かになりました。

将来的には、このリトアニア語を日本に紹介できるような仕事につきたいので、これからさらに、２度、３度とリトアニアに留学し、より深くリトアニア語についての理解を深めていきたいです。

片山先生、熊本先生、長い間ありがとうございました。

片山弘基教授と熊本守雄教授が来春本学を御定年になります。両先生から、次のような文章をいただきました。

ご挨拶　定年退職にあたって

教授　片山　弘基

私は、1975年に山口女子大学文学部の専任講師として着任しました。その年に女子短期大学から4年生の大学に昇格し、そのメンバーとして本学に採用されたのです。その後、約30年を本学教員として勤めました。20年間は山口女子大学文学部の教員として、後の約10年間は国際文化学部の教員として。そして今年度末、定年退職を迎えることになります。

私が30年間ずっと取り組んできたことは研究会活動です。着任早々の哲学研究会から現在のゼミまで、学生諸君や同僚の教員諸氏と一緒にテキストを読みながら議論を続けた年月でした。これらの活動は記録にも論文にもなっていませんが、私の大学生活の活力源で、この研究活動のおかげで休むことなく講義にまた大学・学部業務に取り組むことができたと思っております。大学教員にとって在職30年といえば、ほぼ十分な勤務だといえると思います。

皆様の有形無形のご支援のおかげで勤めを全うできたことに感謝し、御礼申し上げます。

未だ新キャンパスへの移転ならず

教授　熊本　守雄

あと半年ばかりを残して、本学における定年退職を迎えようとしている。本学の前身の山口女子短期大学に昭和41年4月に着任して以来だから、39年間の永きに亘って、勤めたことになる。その間、結婚し、山口に根が生えた如く、家を建て、3人の憲息達も、それぞれに大学の教員になって、自立してくれたので、親としての役目は一応終えたつもりでいる。

目下、新典社より、「物語文学古注釈叢書」の中の一冊として、山口県文書館蔵右田毛利家伝来細川幽齋自筆の「源氏物語古註」を出版することで、悪戦苦闘をしている。1972年の「山口女子短期大学研究報告・第27号」に掲載し始めて以来、30年以上に亘って、本学の研究報告や紀要に発表してきたものを根幹にした上で、大幅に手を入れて、未翻刻部分を加え、一書に纏めることにしている。最近は、製本に用いる糊がよくなり、厚い本も出来るようになってはきているが、千八百頁を超える分量となりそうで、コピーもとれない書籍になるのではないか、と危惧している。

文学部長を勤めていた時に、文学部の改組転換に取り組み、国際文化学部への改組と社会福祉学部の新設については、実現を見た。だが、その後、新キャンパスへの移転問題は、現学長の公約であるにも拘わらず、6年間かけても遅々として進まず、未だに全く見通しがなく、これからも一向に進展しそうにないのは、何とも無念ではある。

平成16年度／国際文化学部公開講座の開催について

共通テーマ　「日本文学の世界」

●日時及び講師●		●テーマ●
10月16日（土）10:30〜12:00	名誉教授・中原中也記念館館長 福田　百合子	「宇野千代の世界」
10月23日（土）10:30〜12:00	教授 武市　眞弘	「防長の和歌・短歌」
10月30日（土）10:30〜12:00	教授 稲田　秀雄	「驚流狂言の世界」
11月13日（土）10:30〜12:00	助教授 野口　義廣	「防長の漢文学」
11月20日（土）10:30〜12:00	教授 熊本　守雄	「中世人のこころ」

◎場　　所／柳井市　アクティブやない（視聴覚室）
◎受講定員／50人
◎受 講 料／無料
◎締　　切／平成16年9月30日（木）

平成15年度

国際文化学部 教育研究充実費 決算報告

（教育充実費は入学時に納入された6万円が財源です）

（単位/円）

歳入決算額	14,379,949
歳出決算額	4,616,997
差引繰越額	9,762,952

監査報告　平成16年5月13日

■監査委員
庶務課長　吉岡　進　印
会計課長　和田　静生　印

歳入の部

費目	歳入額
納入金	5,730,000
繰越金	8,987,187
返納金	△ 337,500
雑収入	262
合計	14,379,949

歳出の部

費目	歳出額
学部運営補助費	203,896
学習資料費	915,007
客員講師費	426,233
オリエーテション費	106,573
語学検定実施費	374,222
演習活動支援費	0
専門演習調査費	355,000
就職対策費	53,547
卒業論文指導費	440,000
情報機器維持費	210,663
親睦活動費	271,662
文化交流委員会補助費	380,919
予備費	879,275
合計	4,616,997

教員の異動

◎平成15年10月1日付
●新　任／講　師　加藤　禎行
◎平成16年4月1日付
●異　動／講　師　永﨑　研宣
（大学本部情報化推進室へ）

〜編集後記〜

本学部の三宅義子教授が権威ある山川菊栄賞を受賞されました。祝賀の至りです。
韓国語弁論大会では本学部学生が大健闘しました。
本学は今後とも、研究・教育に全力をあげて取り組んでいきます。
皆様のご指導・ご便達のほどお願い申しあげます。
〜編集委員は渡邊克義とJ・A・T・D・にしゃんたが務めました〜